

非行少年の対人態度に関する研究（その2）

矯正協会附属中央研究所 大川 力
 横浜少年鑑別所 濱井 郁子*
 愛光女子学園 中島千加子**

キーワード：ソーシャルサポート、社会的スキル、孤独感、非行性、MJAT

1 はじめに

本研究は、非行少年が身近な人たちを、自分にとってどのような人と認知しているか、また、他者とのかかわりの中で、自分をどこに位置づけているかに焦点を当てることにより、非行少年の対人態度の特質を明らかにするとともに、非行性との関連について検討を加えようとして計画されたものである。

2 対象と方法

調査対象者は、1999年10月下旬から12月初旬までの間に、全国の少年鑑別所に観護措置決定により入所した者で、1,851名分の調査票が得られたが、未記入の部分が多い調査票を除外し、合計1,846名（男子1,653名、女子193名）を分析の対象とした。

本研究では対象者の身上条件のほか、次の3つの調査を実施した。

なお、詳細については、前回報告を参照されたい。

A. ソーシャルサポート尺度

岡安ら（1993）が作成したもので、周囲の人が自分を大切に思っているか、自分を助けてくれると期待できるかについての認知に関する尺度であり、父、母など5種類の人について、設定した6つの場面で、サポートして

もらえるかと期待しているかどうかを回答させるものである。

B. 社会的スキル尺度

菊池（1988）によるもので、対人関係を円滑にするために役立つとされる具体的な行動様式（社会的スキル）をどのくらい身に付けているかを測定する質問紙調査である。

C. LSO（孤独感）尺度

落合（1983）によるもので、次の2尺度から構成されている質問紙調査である。

第1尺度 自分がかかわっている人との間で、理解や共感が得られているか。

第2尺度 自分のことを他人とは代わることのできない個別の存在であることに気づいているか。

この2尺度は、以後分かりやすくするため、便宜上第1尺度を「共感・理解尺度」、第2尺度を「個別性尺度」とする。

このほかに法務省式態度検査（MJAT）の結果も利用した。なお、この態度検査は1998年に改訂された新版である。

3 前回報告のまとめ

前回の報告では、調査対象者の特性と、態度検査を除く3尺度についての結果を報告したが、その結果を要約すると、次のとおりである。

*前矯正協会附属中央研究所

**前東京矯正管区

ソーシャルサポート尺度については、全体としては周囲からの援助に期待している傾向が見られたが、サポートの対象や場面によるばらつきが大きかった。また、年少者では30%近くが「父がいない」と回答しており、少年鑑別所に収容される低年齢の少年は片親家庭が多いことが分かる。サポートが期待できる対象としては、期待の大きい方から、男子は母、同性の友人、異性の友人、父、先生・上司の順であり、女子は同性の友人、異性の友人、母、父、先生・上司の順で、女子は親よりも友人により多くのサポートを期待している。

社会的スキル尺度は全体として高得点であるが、この結果をそのまま社会的スキルが高いとすることについてはなお検討を要する。また、設定された場面による差が大きく、非行少年の場合、適切に他者を援助することは難しいと認知しているようである。

なお、一般には年齢が高くなるにつれて社会的スキルが高まると言われているが、そのような傾向は見られなかった。

L S O尺度については、2尺度の組合せにより4類型に分類した結果では、適応型が少ないこと、人の中でにぎやかにして他人と融合しているタイプが多いこと、また、自分の問題は最後には自分で引き受けるといった構えや、自分が唯一無二の存在であるという認識に乏しいという結果が得られた。

今回の報告では、法務省式態度検査の結果のほか、各尺度相互の関連を中心に分析する。

4 結果

(1) 法務省式態度検査 (MJAT)

態度検査は虚偽、自己評価、社会規範、家庭、友人、不良、暴力・発散、安逸の8尺度から構成されている。(論文末の資料1参照)

質問は各尺度とも10問で構成されており、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思

わない」「そう思わない」の5つの中から回答を選ばせるもので、肯定的な回答から5ないし1の点数を与え(逆転する項目もある)、その合計が尺度得点となる。したがって、各尺度の得点は10点から50点の間に分布する。

今回の調査で有効な資料が得られたのは、調査対象者の約97%に当たる1,789名(男子1,608名、女子181名)であった。

ア 尺度別平均得点等

尺度別得点を表1に掲げた。この結果を手引きの資料と比較すると、男子の「家庭」尺度において今回の調査の方が有意に得点が高く、「暴力・発散」尺度では、有意に低かった。また、女子の「自己評価」尺度では今回の調査の方が有意に低かった。

表2は、虚偽尺度の得点をT得点段階により5段階に分け、段階別に各尺度の平均得点を算出したものである。この結果から見ると、男子は虚偽尺度得点の高い者ほど「自己評価」「社会規範」「家庭」尺度の得点が高く、逆に「友人」「不良」「暴力・発散」「安逸」尺度では得点が低くなっており、いずれも分散分析の結果、統計的に有意な差が認められた。すなわち虚偽尺度得点の高い者は、他の尺度でより好ましい方向に回答しやすいことを示している。女子は「友人」以外の尺度で男子と同様な差が認められた。なお、「友人」尺度はその内容からみると、友人に頼りがちかどうかを示しているとも考えられ、年齢的には友人との結びつきを強めやすい時期であることから見て、この項目に肯定的か否定的かは、良い悪いの評価とは結びつきにくいと考えられ、それがこうした結果につながったものと考えられる。

次に、「どちらともいえない」の回答数について見たのが表3で、男子で約半数、女子で約40%が15以下、すなわち1尺度で平均2以下しかこの回答がなかったことを示している。この回答が多いことは検査に対する防衛的な態度を示す指標とも考えられているが、半数以上の項目に対し「どちらともいえない」と回

表 1 態度検査平均得点

性別	尺度	今回調査		手引資料		t値
		平均	S D	平均	S D	
男子	虚偽	27.29	6.56	27.42	6.50	0.510
	自己評価	29.64	6.87	29.70	6.35	0.231
	社会規範	37.39	7.15	36.99	7.14	1.434
	家庭	36.94	8.33	35.57	8.12	4.257**
	友人	35.40	6.73	34.92	6.67	1.834
	不良	30.11	7.60	30.22	7.64	0.370
	暴力・発散	31.44	7.41	32.14	7.28	2.437*
	安逸	22.52	7.18	22.20	6.84	1.164
	人員	1,608		1,110		
女子	虚偽	27.83	7.62	27.56	6.51	0.357
	自己評価	26.94	7.34	28.43	6.67	1.994*
	社会規範	35.71	7.22	35.31	7.58	0.508
	家庭	34.44	9.61	33.75	9.44	0.680
	友人	36.48	6.95	35.40	7.64	1.390
	不良	32.48	9.03	32.91	8.13	0.470
	暴力・発散	29.80	8.10	30.55	7.35	0.910
	安逸	24.46	8.12	23.36	7.90	1.289
	人員	181		174		

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

表 2 虚偽尺度段階別尺度得点

性別	虚偽尺度段階	自己評価	社会規範	家庭	友人	不良	暴力・発散	安逸	人員
男子	1	25.38	35.02	33.45	36.66	33.49	35.20	25.28	105
	2	28.65	35.44	35.15	35.95	32.33	34.01	24.73	451
	3	29.58	37.12	36.49	35.31	30.25	31.83	22.88	567
	4	31.07	39.51	39.49	34.80	27.46	28.45	19.90	382
	5	33.37	41.93	41.34	34.43	25.93	25.32	17.79	103
	全員	29.64	37.39	36.94	35.40	30.11	31.44	22.52	1,608
	F値	25.629	32.625	28.157	2.996	37.217	61.946	42.814	
	有意水準	**	**	**	*	**	**	**	
女子	1	22.94	31.61	28.67	37.33	38.50	35.06	27.67	18
	2	24.51	35.82	33.33	37.47	34.20	31.11	25.69	45
	3	26.22	34.42	33.22	35.84	32.69	31.33	26.42	45
	4	28.34	37.73	36.07	35.80	30.41	27.52	21.84	56
	5	34.88	36.53	41.29	36.88	27.82	24.18	21.24	17
	全員	26.94	35.71	34.44	36.48	32.48	29.80	24.46	181
	F値	9.669	3.088	4.888	0.527	4.598	6.403	3.973	
	有意水準	**	*	**		**	**	**	

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

表3 どちらともいえないの数

度数	男子	%	女子	%
0 ~ 7	384	23.9	23	12.7
8 ~ 15	441	27.4	51	28.2
16 ~ 23	390	24.3	60	33.1
24 ~ 31	264	16.4	32	17.7
32 ~ 39	80	5.0	8	4.4
40 ~ 47	37	2.3	7	3.9
48 ~ 55	6	0.4		
56 ~ 63	4	0.2		
64 ~ 71	1	0.1		
72 ~ 80	1	0.1		
計	1,608	100.0	181	100.0

表4 信頼性尺度とMJPI

MJPI	男子	女子	手引き
虚偽尺度	.036	.002	.502
偏向尺度	.046	.002	-.017
自我防衛尺度	.032	.000	.325
新追加・信頼性	.040	.002	

答した者は、男子が3%、女子は4%程度であった。

以上の結果から見て、態度検査の虚偽尺度で高い得点を示した者は、回答の態度に偏りがあると考えられ、今後の分析から除外することとした。また、「どちらともいえない」の回答が全質問の半数40を超えている者も同様の理由から除外することとした。

なお、法務省式人格目録(MJPI)の3つの信頼性尺度と態度検査の虚偽尺度との積率相関係数(Pearson)は、表4に示すとおりである。

この結果から見ると、態度検査の虚偽尺度と人格目録の信頼性尺度とは相関が見られなかった。

イ 社会的スキル尺度との関連

態度検査の各尺度と社会的スキル得点との積率相関係数(Pearson)は表5のとおりである。この結果から見ると、「自己評価」「社会規範」「家庭」は男女とも有意な正の相関が、また「安逸」については有意な負の相関が見られ、このほかに男子は「友人」についても有意な正の相関が見られた。これは自己評価が高く社

会規範に対して肯定的で、友人に対しても肯定的な態度を示す者は社会的スキルが高いことを意味しており、態度検査と社会的スキル尺度の結果が一致していることを示している。

ウ LSO尺度との関連

態度検査の各尺度とLSO尺度との相関は表5に示したが、共感・理解尺度は男子は社会的スキル尺度と同様の結果となっている。女子は「自己評価」とは相関が見られず、「友人」と「暴力・発散」に有意な相関があるなどやや異なった結果となっている。一方、個性性尺度について、男子は「自己評価」「社会規範」「家庭」「友人」と有意な負の相関、「暴力・発散」「安逸」については正の相関を示しており、社会的スキルや共感・理解とは反対の傾向を見せているが、相関はそれほど高くはない。女子は「社会規範」、「家庭」と有意な負の相関が得られたが、あまり高くはなかった。この尺度は、落合(1983)によれば「自分のことを他人とは代わることのできない個別の存在であることに気づいているかどうか」の尺度とされている。しかし、「自己評価」や「社会規範」と負の相関を示していることは、自分という存在が他人とは違った優れた面を持っているという認識よりは、他人より劣っているのではないかという劣等感が強いものと考えられる。

(2) 外的基準と各尺度との関連

ア 非行期間

初めて警察補導の対象となった非行を初発非行、初発非行から本件非行までの期間を非行期間とし、その期間を「1年以内」「2年以内」「2年を超える」の3群に分けた。また、男女別、さらに男子については、年齢群別にして、各尺度について比較を行った結果が表6である。

ソーシャルサポート尺度では男子・年少少年の「1年以内」の群とその他の2群間で、先生・上司に有意な差が見られ、非行期間1年以内の者よりも、期間が長いの方が、先生・

上司からのサポートに期待していることを示している。また、男子・年長少年では異性の友人については有意な差があり、「1年以内」の者は「2年を超える」者よりも高得点を示した。

社会的スキル尺度では、男女とも非行期間

による差は見られなかった。共感・理解尺度及び個別性尺度については、男子・年長少年は「1年以内」が他の2群より得点が有意に高かった。これは非行初発からの期間が短い、すなわち非行性が進んでいない方が自分を他人とは異なる独自の存在であると認知してい

表5 態度検査との相関

性別	態度検査	社会的スキル	共感・理解	個別性
男子	自己評価	0.482 **	0.349 **	-0.126 **
	社会規範	0.097 **	0.249 **	-0.168 **
	家庭	0.227 **	0.387 **	-0.239 **
	友人	0.135 **	0.228 **	-0.171 **
	不良	0.048	-0.007	0.032
	暴力・発散 安逸	0.030 -0.169 **	-0.038 -0.248 **	0.118 ** 0.104 **
女子	自己評価	0.504 **	0.127	0.041
	社会規範	0.158 *	0.286 **	-0.165 *
	家庭	0.223 **	0.403 **	-0.193 *
	友人	0.084	0.245 **	-0.136
	不良	0.057	-0.101	0.002
	暴力・発散 安逸	-0.069 -0.193 *	-0.201 ** -0.262 **	0.086 -0.053

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

表6 初発非行からの期間

性別・年齢群	尺度		初発非行からの期間			F検定
			①1年以内	②2年以内	③2年を超える	
男子・年長	共感・理解	人員	149	65	372	*
		平均	39.05	37.29	37.78	
		S D	4.83	5.79	6.13	
男子・年少	先生・上司サポート	人員	136	36	27	**
		平均	16.82	18.42	19.78	
		S D	4.22	4.29	3.72	
男子・年長	異性友人サポート	人員	129	61	324	*
		平均	20.05	19.62	19.11	
		S D	3.31	3.39	3.82	
男子・中間	MJAT(友人)	人員	228	170	217	*
		平均	36.43	36.42	34.99	
		S D	6.02	6.35	7.47	
男子	MJAT(家庭)	人員	147	61	358	**
		平均	37.47	39.16	36.03	
		S D	7.72	6.25	9.14	
女子	MJAT(虚偽)	人員	91	30	34	**
		平均	26.34	24.20	29.14	
		S D	6.71	6.09	6.05	

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

ることを示している。

態度検査では、男子・中間少年の「友人」尺度で非行期間「2年以上」の得点が有意に低く、また、男子・年長少年の「家庭」尺度で、非行期間「1年以内」の得点が「2年以上」の得点より有意に高くなっている。女子は「虚偽」尺度で非行期間「2年以上」の得点が高かった。このように態度検査では一部に差がある程度で、非行期間との間にはっきりとした関連は見られなかった。

イ 施設経験

施設経験については、施設収容を伴う処分の有無について見たものである。ここでいう施設とは養護施設や児童自立支援施設（旧教護院）も含め、保護処分としての施設入所経験が過去に一度でもあれば、「あり」とした。

ソーシャルサポート尺度と社会的スキル尺度では有意な差は見られなかった。共感・理解尺度及び個別性尺度では、男子・年少少年において、個別性の得点で施設経験のある群がない群よりも得点が有意に高かった。

態度検査についての結果を表7に示した。それによると男子の「社会規範」「家庭」「友人」「不良」「暴力・発散」「安逸」について有意差があり、そのうち「社会規範」は「あり」の群が得点が有意に高かったが、その他は「なし」の群の方が高かった。

(3) ソーシャルサポート尺度と他の尺度との関連

前回報告ではソーシャルサポート尺度の各対象に対する態度について、6場面を通じての回答から、信頼群、信頼優位群、葛藤群、不信優位群、不信群の5群を設定した。今回は、信頼群と信頼優位群を信頼群、不信群と不信優位群を不信群としてまとめ、信頼群、葛藤群、不信群の3群とし、更に父母については、父母ともに「信頼」とした群を、対父母信頼群（以後信頼群）、父母ともに不信とした群を対父母不信群（以後不信群）、それ以外を対父母葛藤群（以後葛藤群）の3群に分

けた。この際、父母がそろっていない者は分析から除外した。

ア 父母への態度

父母への態度別の各尺度の平均得点等は、表8のとおりである。まず社会的スキル尺度は、男子は有意差があり、信頼群は葛藤群及び不信群よりも社会的スキル得点が高かった。一方、女子では有意な差はなかった。

次に、共感・理解尺度では、男子は信頼群の得点が高く、以下葛藤群、不信群の順であり、女子は信頼群よりも不信群の得点が高かった。また、個別性尺度については、男子は得点が高い方から不信群、葛藤群、信頼群の順となり、どの群の間でも有意差があったが、女子では差が見られなかった。

態度検査との結果については、他の対象に対するソーシャルサポートと併せて表9に掲げた。父母への態度については、男子は「友人」を除く7つの尺度、女子は4つの尺度で有意差が見られた。男子の信頼群は不信群に比してより望ましい方が高くなっている。女子の「家庭」では得点が信頼群、葛藤群、不信群の順になっており、どの群の間でも有意な差が見られた。

イ その他の対象への態度

社会的スキル尺度とLSOの2尺度については、各群間に統計的に有意な差は見られなかった。態度検査は、男子で有意な差があったのは次の尺度であった。

先生・上司～「虚偽」「自己評価」
「社会規範」「家庭」「安逸」
同性・友人～「虚偽」「自己評価」
「社会規範」「家庭」「友人」
「暴力・発散」
異性・友人～「虚偽」「自己評価」
「社会規範」「家庭」

大体の傾向としては、信頼群が他の2群より「安逸」を除き得点が高い、すなわち肯定的な態度を示している。ただし、同性の友人においては、「暴力・発散」について信頼群は不

表7 態度検査と入所回数

尺度	群別	男子			女子		
		平均	SD	t 値	平均	SD	t 値
虚偽	初入	26.30	5.65		26.50	6.58	
	再入	26.30	6.18		26.38	6.95	
自己評価	初入	29.37	6.87		26.28	7.41	
	再入	29.37	6.96		25.58	5.75	
社会規範	初入	36.91	7.13	3.015*	35.42	7.13	
	再入	38.21	7.03		36.50	7.68	
家庭	初入	36.69	8.18		33.04	9.94	2.415*
	再入	36.88	8.88		38.21	7.44	
友人	初入	36.09	6.30	5.613**	36.86	6.56	
	再入	33.83	7.56		34.96	7.69	
不良	初入	30.66	7.41	2.625**	32.99	8.59	
	再入	29.46	7.90		33.29	9.41	
暴力・発散	初入	32.14	7.12	2.259*	30.71	8.00	
	再入	31.14	7.80		28.42	5.96	
安逸	初入	23.37	7.02	6.382**	25.07	8.11	
	再入	20.64	7.14		21.96	7.59	

注1) 人員は男子・初入1,094名, 再入362名, 女子・初入135名, 再入24名

注2) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

表8 父母への信頼別社会的スキル, LS0尺度得点

性別	尺度		① 信頼	② 葛藤	③ 不信	F 値	多重比較
男子	社会的スキル	人員	754	201	48	10.262**	①>②, ①>③
		平均	60.94	57.88	56.90		
		SD	9.78	10.26	10.39		
	共感・理解	人員	760	200	47	45.078**	①>②>③
		平均	39.20	35.83	33.94		
		SD	5.04	6.50	7.64		
個別性	人員	758	198	48	13.647**	③>②, ③>①	
	平均	17.97	19.32	20.67			
	SD	4.34	5.01	4.97			
女子	社会的スキル	人員	67	31	14	1.287	
		平均	59.75	57.03	56.57		
		SD	9.27	8.51	10.93		
	共感・理解	人員	68	31	14	8.858**	①>③
		平均	39.78	37.42	34.00		
		SD	4.52	5.95	4.30		
個別性	人員	66	31	13	2.518		
	平均	19.67	21.45	22.08			
	SD	4.28	5.21	3.99			

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

表9 ソーシャルサポート対象別態度検査得点

対象	性別	MJAT尺度	①信頼	②葛藤	③不信	F 値	多重比較	
両親	男子	人員	765	201	48			
		虚偽自己評価	26.68	25.04	25.63	6.633**	①>③	
		社会規範	30.18	27.53	25.79	19.933**	①>② ①>③	
		家庭	37.70	36.41	32.71	12.898**	①>② ①>③ ②>③	
		不良	39.16	32.37	23.06	176.403**	①>② ①>③ ②>③	
		暴力発散	29.93	30.75	32.69	3.683*	①<③	
		安逸	31.74	31.74	34.48	3.264*	①<③ ②<③	
			22.39	23.14	26.08	6.746**	①<② ①<③ ②<③	
	女子	人員	68	31	14			
		虚偽自己評価	27.79	26.68	21.29	5.288**	①>③	
		社会規範	37.16	33.61	33.93	3.477*	①>②	
		家庭	37.75	32.42	20.07	30.676**	①>② ①>③ ②>③	
			28.76	32.48	33.36	3.891*	①<② ①<③	
	先生・上司	男子	人員	648	106	174		
虚偽自己評価			26.61	26.83	24.66	9.802**	①>③ ②>③	
社会規範			30.93	29.28	27.37	20.647**	①>② ①>③ ②>③	
家庭			37.87	37.28	35.90	5.353**	①>③	
安逸			38.74	37.18	35.70	11.425**	①>③	
			21.48	23.56	24.17	12.102**	①<② ①<③	
女子		人員	56	6	26			
		社会規範	37.95	34.33	31.88	7.404**	①>③	
同性友人		男子	人員	1,171	93	107		
			虚偽自己評価	26.45	25.33	24.95	4.522*	②>③
	社会規範		30.09	27.70	24.93	33.875**	①>② ①>③ ②>③	
	家庭		37.51	37.14	35.05	5.991**	①>③ ②>③	
	友人		37.10	36.28	34.31	5.798**	①>③	
	暴力発散		36.48	32.49	30.07	62.914**	①>② ①>③ ②>③	
			32.19	30.92	30.48	3.743*	①>③	
	女子	人員	147	8	3			
		友人	37.24	27.88	26.33	11.848**	①>② ①>③	
		暴力発散	30.65	23.88	27.00	3.130*	①>②	
異性友人	男子	人員	1,030	85	134			
		虚偽自己評価	26.55	25.31	24.78	6.902**	①>③	
		社会規範	30.26	28.29	26.97	16.592**	①>② ①>③	
		家庭	37.61	37.00	35.19	7.072**	①>③	
			37.14	36.02	35.36	3.258*	①>③	
	女子	人員	120	17	8			
		虚偽	27.24	23.12	24.00	16.592*	①>②	

注) *は5%水準, **は1%水準以下で有意であることを示す。

信群より得点が高く、同性の友人によるサポートを期待している者は、力による解決や直接的な感情の発散を容認する傾向がある。

5 考察

(1) 態度検査について

態度検査と社会的スキル尺度との関連についてみると、社会的スキルが高い者は、態度検査においては自己評価が高く、社会規範に対して肯定的であり、友人に対しても肯定的な態度を示すなど、2つの尺度で共通の傾向が見られた。一方、LSO尺度の方では、共感・理解尺度は男子で比較的一致した結果を示したが、女子については「自己評価」との相関が低く、「友人」と「暴力・発散」との相関が高いなど、共感や理解がごく狭い対人関係の中だけで維持されているのではないかと考えられる。また、個別性尺度については、「自己評価」や「社会規範」と負の相関が見られ、この尺度が意図している個別性の存在とは異なっているように思われる。その理由としては自分を客観的に見ようとしていない、あるいは、劣等感の存在から自分を過小評価しているためとも考えられるが、この結果だけでは結論できない。

最後に、ソーシャルサポート尺度と態度検査の関係について検討する。まず男子についてであるが、ソーシャルサポート尺度の結果により、信頼群、葛藤群、不信群の3つに分けてみると、両親、先生・上司、同性友人、異性友人のどれについても、信頼群が他の2群より態度検査の各尺度で望ましいとされる方が高くなっている。これは周囲の人に信頼感を持っていて、自分をサポートしてくれると信じている方が、自分、社会規範や家庭に対して肯定的であり、社会的判断が健全であることを示している。これに対して女子の場合は、両親については男子と同様の傾向を示しているが、その他の対象については1つ、

ないし2つの尺度で有意差が認められただけであった。これは両親を除いた他の対象の場合、不信群と葛藤群の人員が少ないことが影響していると思われ、この結果では結論を出すことができない。

以上の結果を総合すると、態度検査とその他の3尺度との間には関連が認められ、社会的スキルが高く、共感性や他人の感情についての理解があり、また、身近な人に対して信頼感を持っている者は社会的態度においてあまり偏りを見せていないと結論できる。

なお、態度検査については改訂されて間もないので、参考までに年齢別の尺度別得点を資料2として論文末に掲げた。

(2) 非行性について

今回の研究では対人態度と非行性との関連についての検討が主要な課題であるが、今回は非行性の指標として施設歴（保護処分による施設収容歴）の有無を用いることとした。施設収容処分、特に児童自立支援施設（旧教護院）収容は、家庭の保護監督能力と関連しているものであり、非行性の問題だけではないが、ここでは便宜上非行性の指標としてみることとした。

施設歴と尺度との間については、男子の年少群で個別性尺度に有意差が見られただけであった。非行により施設収容を経験している年少の男子少年が施設収容の経験のない者と比べて、自分が他人と代わることのできない独自の存在としての認識を強く持っていることになるが、このことは同時に、「結局、自分は一人でしかないと思う」、「結局、人間は一人で生きる運命にあると思う」といった項目に代表されるような、頼るべき存在がいなくて実感させられるような深い喪失感につながっていることもうかがえる。

施設歴の有無から捉えた非行性で見ると、社会的スキルについても、他者と自分への捉えた方についても直接的な関連があるとまでは言えない。

(3) ソーシャルサポートについて

父母からの支持・援助への期待の濃淡によって、社会的スキルや、自分自身や他者のとらえ方に差が出るのかについて検討した結果、男子では父母ともに信頼感を持っている者は、葛藤や不信感がある者よりも、高い社会的スキルと、他者への共感的な態度を持っていることが示された。また、「自分の人生は独自なものである」、「自分は結局のところ一人で生きていかななくてはならない」といった、個別性を強く自覚する傾向は、両親に不信感を抱いている少年で強いことが示された。これは、安心して頼ることができない家庭状況の中で、少年なりの強がりや合理化といった意味合いが強いことが考えられる。

女子では、両親への態度によって、有意な差が見られた尺度は共感・理解尺度のみであり、両親への信頼感がある者は不信感を抱いている者よりも、他者への共感的な態度を強く持っていることが示された。

総じて、父母への信頼感が強い者は、他者を受け入れ理解しようとする構えがあるが、父母への不信感が強い者はその反対の傾向を示しており、父母への信頼感と対人関係との間に密接な関係があることが認められた。

6 おわりに

非行少年の対人態度について、ソーシャルサポート尺度、社会的スキル尺度、L S O（孤独感）尺度の3種類の質問紙調査と法務省式態度検査との関連を中心として検討してきた。

男子では両親や友人、教師・上司など身近な人に対してサポートしてもらえると感じている者ほど、社会的スキルや態度検査から見た価値観については、より好ましい方向にあることが結論できた。すなわち、身近な人に信頼感が持てる場合は、社会的スキルが高く、価値観にもゆがみが少ないことが分かった。

ただ、価値観のゆがみが対人不信感につながるのか、逆に対人不信感を強めることが価値観のゆがみに結びつくのかについては結論できない。

また、施設歴を指標とした非行性との間では、はっきりした関係は認められなかった。

「施設歴の有無」という単一の指標から非行性を判断することはもとより困難であるが、非行性の指標として何を用いるかについて、これまでの研究においても決定的なものは得られていないし、今後の研究を待ちたい。

一方、女子については、ごく一部に関連が認められただけで、全体としてははっきりした結論を出すことはできなかった。これは観護措置をとられた女子の場合、年少少年と年長少年では、非行の内容が異なるだけでなく、家庭の状況等に大きな違いがあるとされているため、年齢や非行の内容を考慮した分析が必要であるが、統計的な検討に耐え得るだけの資料を確保することができず、詳細な分析を行うことができなかったことによる。この点については事例分析的な方法を用いるなど、別の観点からの分析が必要であると考えられる。

引用文献

- 大川力・濱井郁子・中島千加子 2000 非行少年の対人態度に関する研究（その1）
中央研究所紀要10, 87-101
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41巻3号 302-312
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度（L S O）の作成 教育心理学研究, 30巻4号 60-64
- 落合良行 1983 孤独な心—淋しい孤独感から明るい孤独感へ—サイエンス社
- 菊池章夫 1998 思いやりを科学する 川島書店

資料1 MJATの各尺度

尺度名		定 義
信頼性 尺度	虚偽	常識的にはあり得ないことを自分に当てはまると反応し、実際以上に自分をよく見せようとする傾向。
	自己評価	自分自身を肯定的にとらえているか、否定的にとらえているか。
臨床尺度	社会	法律や警察など社会規範に対して肯定的であるか否定的であるか。
	家庭	家庭や家族に対して肯定的であるか否定的であるか。
	友人	友人に対して肯定的であるか否定的であるか。
	不良	不良者に対して肯定的であるか否定的であるか。
	暴力・発散	腕力で物事を解決することや感情発散に対して、肯定的であるか否定的であるか。
	安逸	安逸・せつな的な生活に対して肯定的であるか否定的であるか。

資料2 MJAT性別・年齢別平均得点

性別	年齢	人員	虚 偽	自己評価	社会規範	家 庭	友 人	不 良	暴力・発散	安 逸
男 子	14歳	100	26.83	28.81	36.82	36.23	34.94	30.20	31.07	22.89
	15歳	206	27.40	30.07	36.75	37.19	35.15	29.58	31.70	22.17
	16歳	305	27.18	29.22	37.87	37.01	34.90	30.19	31.15	22.50
	17歳	357	27.64	29.75	37.29	37.26	35.50	30.24	31.31	22.20
	18歳	332	27.19	29.69	37.57	36.59	35.47	29.68	31.27	22.30
	19歳	308	27.16	29.85	37.43	36.93	36.04	30.64	32.03	23.27
	計	1,608	27.29	29.64	37.39	36.94	35.40	30.11	31.44	22.52
	手引	1,110	27.42	29.70	36.99	35.57	34.92	30.22	32.14	22.20
女 子	14歳	14	26.79	25.50	34.29	30.14	35.93	31.86	31.07	24.86
	15歳	17	26.29	28.00	34.82	35.18	36.82	35.82	33.00	26.06
	16歳	39	28.13	28.15	36.74	34.87	35.18	32.92	29.33	23.44
	17歳	39	29.41	27.33	36.41	36.95	36.82	30.79	28.72	24.62
	18歳	37	27.57	28.27	33.54	33.05	37.95	34.84	31.22	26.27
	19歳	35	27.17	23.80	37.09	33.97	36.06	30.00	27.94	22.57
	計	181	27.83	26.94	35.71	34.44	36.48	32.48	29.80	24.46
	手引	174	27.56	28.43	35.31	33.75	35.40	32.91	30.55	23.36